

経営・人事

数々の企業の合併・買収(M&A)を仕掛け、成敗させてきた宇都宮徳治氏。M&Aが日本企業の成長戦略として定着するのに貢献した一人だ。このディールメーカーはブームの様相を呈する昨今のM&Aの背後に、そしてその先に何を見いだすのか。

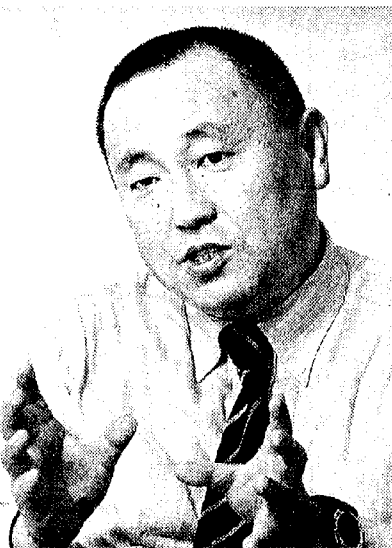
数々の企業の合併・買収(M&A)を仕掛け、成敗させてきた宇都宮徳治氏。M&Aが日本企業の成長戦略として定着するのに貢献した一人だ。このディールメーカーはブームの様相を呈する昨今のM&Aの背後に、そしてその先に何を見いだすのか。

会社の中では何百人という社員が昨日と同じ仕事を続け、社内の風景はいつもと何ら変わらない。しかし、その陰で、ごく一握りの経営幹部が会社を売り払う交渉を隠密裏に進めている。しゅん巡、変心、保身……。会社の内外を揺るがす決断

仕事人 秘録

二度とないドラマ

創徳企業情報社長 宇都宮 徳治氏



「企業は取り換えのきかない商品」

泥臭いM&A アートに

えるのは経済合理性であらう。そこには、かつてのM&Aに漂っていた後ろめたさなどみじんもない。

宇都宮氏はバブル経済が頂点に達しようとしていた一九八八年から約八年間、旧山一証券でM&A業務を担当した。当時の山一は日本のM&A取引の先頭を走っていた。

認会計士らが集まってシス、売れ物になるをつくり上げるプロデューサーだ。予期せぬ展開に直

今では大型案件の多くは外資系の投資銀行がアドバザイザーを務め、経営学修士(MBA)や弁護士、公人との関係が大きな比重を占める。洗練されたM&Aとはかけ離れた世界だ。

山一証券の自主廃業決定から約一年半後の九月七月、中堅・ベンチャー企業に特化したM&A仲介会社、創徳企業情報社を旗揚げした。

私たちが一回限り、二度これから振り返ってみようと同じ筋立てはないドラマと思う。